

「なんで里に妖魔が!? 結果はどうしたんだ!」

「もうどこまで妖魔が来てるぞ! 警護班はどうしたんだ!」

「助けて! 死にたくない!」





それは前触れもなく突然訪れた。
里を方位するように突如現れた妖魔の群れ。
なぜか結界は機能せず、自体を把握する間もなく
夜の里は地獄絵図に変わった。

「当主！裏側も駄目です！囲まれています！」
「なんとか当主だけでもお逃げください！」





早くして当主へと祭り上げられた身だが、
これだけ統率の取れた妖魔を私は見たことがない。
これ程の群れを統率出来る程の強大な妖魔が果たしているのだろうか。
先日帰ってきた莉音様の言葉が脳裏をよぎる。



「妖魔王はもう脅威ではありません」

「一際邪悪な気配がこちらに向かってきています！
私達ではお守り出来ません！」

「そうだ、莉音様！ 莉音様はどこに！？」
妖魔主を倒したあの方なら！」

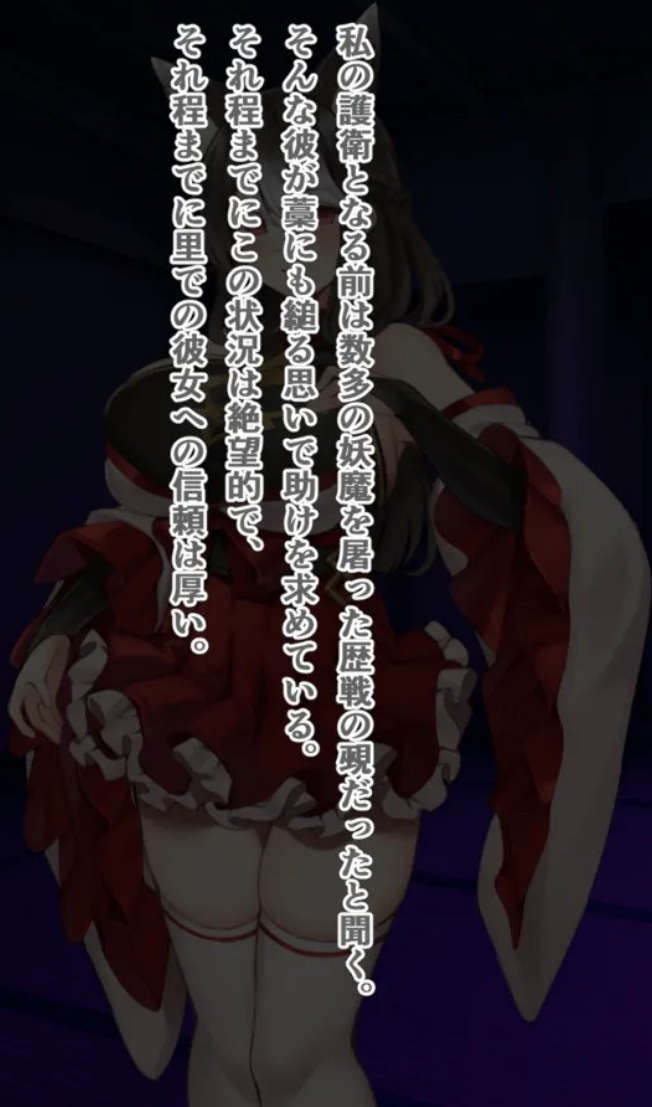


「呼びましたか？ご当主様」



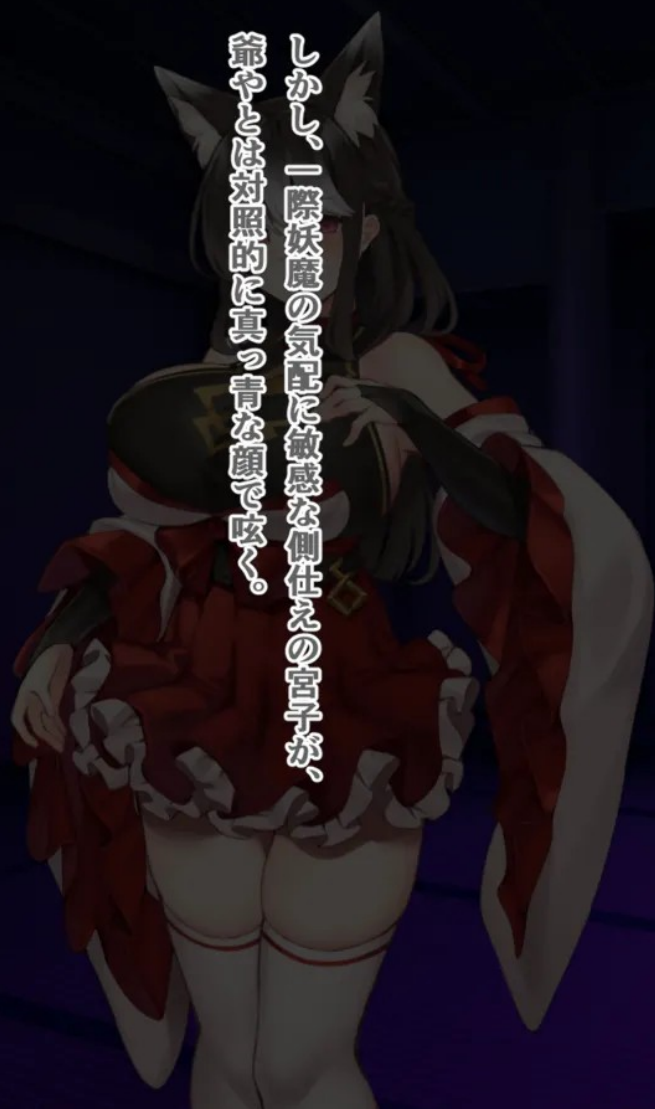
「莉音様！助かった！なんとかご当主だけでも迷がしてくれ！
いや、貴方ならこの妖魔の群れなんとか出来なにか？」





私の護衛となる前は数多の妖魔を屠った歴戦の現だったと聞く。
そんな彼が裏にも纏る思いで助けを求めている。
それ程までにこの状況は絶望的で、
それ程までに里での彼女への信頼は厚い。

しかし、一際妖魔の気配に敏感な側仕えの宮子が、
爺やとは対照的に真っ青な顔で咳く。



「ま、待ってください……なんで……
なんで、莉音様から妖魔の気配が……」



「……何を言ってるんだ宮子？」

「い当主の言うとおりだよ宮子！ 妖魔に囲まれてるんだぞ！
ふざけた事を言うな！ 一刻を争うんだぞ！」



「いえ、間違ってますせん！下がってください！
彼女から妖魔の気配、それもとてゝ邪悪なものを感ぜます！」



「……流石ですね。これでも結構隠したつもりなんですが。
側仕えだと甘く見ていました。もう出てきていいですよコトネ」
「だからそんな回りくどい事しなくていいって言ったのに。
姉様は物好きなんだから」



「助かったと一瞬思わせた方が絶望に落とした時にいい
悲鳴を上げてくれるでしょう？こういうのは楽しまないと。
でもバレてしまったのならこんな格好してる必要ありませんね」



「なんだその姿は……？」

「なんだも何もこれは私の真の姿です。

妖魔王様の傀儡奴隷、妖魔レイネそれが今の私です」

「同じく、妖魔王様の愛玩低級妖魔コトネ。

この里は妖魔王様の供物になるの。いひひっ」





「折角です。最後の時、存分に楽しみましょう？ご当主様♡」







「でも、もう手遅れです。里の民は一人残らず妖魔王様の賛となるのです。
なんと光栄な事なのでしょう。さあ、貴方も力を抜いて……♡」
「ぐあああぁっ」





「やめるんだ琴音、君はこんな事をするやつじゃ」
「いひひっ、そんな事言って妻い勃起してるじゃん。
いっばい気持ちよくしてあげる。ほら、あっちでも始まるよ」

「いっ」







「気持ちいいでしょう？ 妖魔の触手ちんぽ。
妖魔王様のはもっと凄いんだから。
死んじゃうかもって思うぐらいグチャグチャにしてくれるの。
ああ、考えただけで濡れてきちゃった。
でも今はお仕事中だから、貴方で我慢してあげる」



「待て、やめろ！ 私には家内が……んひゃっ……」
「大丈夫、奥さんも今頃触手と楽しんでるよ。」
「……って、もう出ちゃったの？ 挿れたはっかりだよ？」





「姉様の言う通りだよ。帰って妖魔王様に使って頂くにしたって、
こんなんじや前菜にだってならないよ。私達妖魔の本気を見せてあげる♡」
「……これは、淫気……ぐ、あああああああ」



「どうです？そこらへんの妖魔の薄い淫気とは桁違いでしょう？
ほら、正気を手放して……♡理性だって要りません。
獣のように、まぐわいましょう？」
「あ、あああああがが」



「頭が、おかしくなる……やあ、とあつへつ……」
「止めたーい♡姉様程じゃないけど、私のだってなかなかでしょう？
ほら、見違えるぐらい元気になった♡」



「はぁ、んひっ、気持ちよくなりたくなのだった♡
こんなの、むりっ♡もっとお♡」
「間接的とはいえ、私達の淫気を吸っておかしくならないなんて、
宮子は素質がありますね。御主人様にいい土産が出来ました」



「さ、さいん、それ、おねあひ」
「がっつきすぎ♡それぐらい乱暴な方が奥さんも嬉しいと思うよ。
もう会えないだらうけど」



「ア、ガガ、タスケ……」
「まだ自我があるんですか？ ほら、無理をしないで。
精子と一緒に全部出してしまえばいいでしょう？ ほら、びゅーって♡」





「ガアアアアア!!」
「イクイクイクウウウウウウウウウウ♡♡♡♡♡」

びしょ♡♡♡♡♡!!

「……はあ、はあ……と待ってー！ イッたばかりじゃあない♡」
「んっ、ふふ、今のはほんの少し良かったですよ。」
さて、そろそろ他を見て回りましょうか」



「姉様ったら、まだ食い足りないだけですよね」
「コトネもでしょう？ さあ、新しい獲物を探しましょう？
全ては妖魔様のために」











































































